orinas
オリナス

京都大原記念病院グループ 広報誌

vol.8 ／ 2023.01

特集 京都近衛リハビリテーション病院「新体制」

Kyoto Ohara Memorial Hospital Group

特集

「新体制」が始動！
京都近衛リハビリテーション病院に児玉直俊新院長が就任

これから志すものを、新院長のインタビューとともにご紹介します。

新体制で目指す日本一のリハビリテーション病院。

3年ぶりの全面点火が話題となった五山の送り火が灯る吉田山（左大文字）の麓に拠を構える京都近衛リハビリテーション病院。眼前に京都大学医学部附属病院という環境で、地域医療を支える急性期・回復期・生活期の機能分化と連携のあり方を問う「挑戦」の拠点として2018年4月に開院しました。

その名の通り「リハビリテーション」を専門とする同院。京都大原記念病院グループの培ってきた経験と実績に基づき工夫を凝らしたリハビリ訓練室や、オリジナルのADL訓練ゾーン、屋上訓練スペース（近衛天空回廊）などを設けています。全100床のコンパクトな病院でありながら、広い廊下や病室などゆとりある環境を活かして地域における信頼を得て来ました。

「病院だから仕方ない」と感じさせている不便や不満をそのままにせず、一つひとつ向き合い、解消していく。総合的に満足していただける病院でありたい。

気持ちに寄り添い、個々の目標が達成できるように多職種と連携して看護・介護を提供する！患者様、ご家族が安心して過ごせる環境、生き生きと笑顔でリハビリが継続できる病院でありたい。

日々の患者様とのコミュニケーションを何より大切にできる病院でありたい。

「日本一のリハビリ病院」という理想に向けて

安心してリハビリに集中できる病院でありたい。患者様、ご家族の想いをくみ取り、寄り添って退院支援していきます！

職員同士の気持ちのよい挨拶！日々、それぞれの職種が目の前の患者様にベストを尽くすことが良い病院につながる！

全ての職種が笑顔で患者様と接すること。そして、患者様ができるだけ「その人らしく」心地よい環境でリハビリに専念できる病院でありたい。

迎えた開院5年目の2022年10月、児玉直俊（前院長補佐）が新院長に就任しました。岡伸幸前院長は豊富な経験をもとに、特別院長補佐として新体制を支えます。新体制が志すのは「日本一のリハビリテーション病院」。医療の質向上は当然ながら、「病院だから仕方ない」と感じさせている不便や不満などの要素を一つひとつ解消し、スタッフ一人ひとりの意識を向上させることで、総合的に満足度が高まるよう努めます。

『日本一のリハビリ病院』になるために
患者様の「総合的な満足度」をあげていくための3つの環境づくり

act 1 実践的なリハビリ環境 Facility

経験と実績に基づく、オリジナルの環境づくり。

「自立支援」「介護負担の軽減」「安心の提供」これら、京都大原記念病院グループが掲げるリハビリの3つの目的を果たすために、最適なリハビリを提案できる環境を設けました。広々としたリハビリ訓練室には、早期段階からの歩行訓練を可能にする「天井走行式免荷リフト」「薄型低床トレッドミル」をはじめ、個別の希望に沿える環境を整えています。なかでも「ADL訓練ゾーン」は、京都大原記念病院グループの経験と実績に基づくオリジナルの設備です。1LDKの一室を模した環境で、玄関まわり、廊下、キッチン、リビング、和室、トイレ、お風呂などで実生活のシミュレーションが可能です。退院後の生活を見据えた環境設定も想定します。

ADL訓練ゾーン

近衛天空回廊
（屋上・屋外リハビリテーション）

近衛坂

坂道や神社仏閣の多い京都の街での日常生活を取り戻せるようにとの願いを込めて、「京路地を歩く」をコンセプトに設けた「近衛坂」「近衛天空回廊」などは特長的です。

しっかり食べて、しっかり動く。そのためにできるコト。

食事は入院生活の一番の楽しみであると同時に、リハビリ治療の効果に直結する重要なものです。患者様に口からしっかりと食べていただける「リハビリの活力」であることが重要です。活動量に見合う十分な栄養配分は勿論のこと、見た目や温度など、食べたいと思えるような病院食が理想です。診療報酬制度や給食業界の事情など取り巻く環境が厳しさを増すなかでも、多くの患者様の要望に応え続けるために「直営」に舵を切りました。現場の声を、直接厨房運営に活かし、患者様の食事に対する想いに寄り添う食事サービスを追求していきます。

act 2 食事改革 Meal reform

リハビリの活力になる食事を提供すること。管理栄養士、調理師等、厨房に関係するスタッフの想いはこの一言に尽きます。直営化以降、慌ただしい日々が続きますが、挑戦を続けます。

栄養調理チーム リーダー
管理栄養士
中西 輝子

直営厨房の始動

京都大原記念病院グループは病院、介護施設ともに厨房運営を外部委託していましたが、現場の声を直接運営に活かせる点を期待し、直営に舵を切りました。

11月
ある日の
献立

act 3 居心地の良さの提供 Comfortable

患者様とご家族の悩みや不安に寄り添い、一緒に考えて、少しでも快適に過ごしていただけるように。不安を少しでも無くしていけるような「心のサポート」に努めます。

京都近衛リハビリテーション病院
コンシェルジュ
水野 彩

コンシェルジュの配置

特別室（1室）と個室（15室）に専属で配置。患者様のお話を伺い、医療スタッフやご家族との橋渡しをすることで入院生活をサポートします。

京都ブランドのアメニティグッズ

「京都ブランド」「ナチュラル志向」にこだわった各種アメニティグッズを取り揃えました。「KOTOSHINA」「NEMOHAMO」「emu」等。

アメニティレンタルサービス

「衣類」「タオル類」「日用品」のレンタル、及び「私物洗濯※1」をご利用いただけます。 ※1 取り扱いができないものなど、注意事項がございます。

リハビリ治療を目的とする入院生活に安心と満足を。

病院で過ごす3ヶ月※は、リハビリ（治療）を目的とする入院であると同時に、病院を拠点とした生活です。その人らしく過ごせる「居心地の良さ」が、安心してリハビリに集中できる環境をつくります。そのために、「病院だから仕方ない」と感じさせている不便や不満は、一つひとつ取り除いていきます。2021年に「コンシェルジュ」を配置しました。些細なことや「誰に相談していいかわからない」ことにも耳を傾け、日常生活をサポートする専属スタッフです。その他、病室でも利用可能な無料Wi-Fiや、入院グッズのレンタルサービス、コンビニ同行など、できる限り快適に過ごしていただくための環境をご用意しています。

※京都近衛リハビリテーション病院 平均在院日数87.5日（2021年度）

Greeting

日本一のリハビリ病院へ

児玉 直俊
Naotoshi Kodama

順天堂大学医学部卒。初期臨床研修後、京都市内の回復期リハビリ病棟勤務、京都府立医科大学リハビリテーション医学教室を経て、2018年京都近衛リハビリテーション病院開院と共に院長補佐に就任。2022年10月同院院長に就任、現在に至る。「盛時には驕らず、衰時には悲しまず」がモットー。何事にも浮き沈みはあるが、常に物事を俯瞰的に捉え、かつ感情に揺さぶられることなく行動する。医療法人社団行陵会 副理事長。

『日本一のリハビリ病院』は夢物語ではなく、ポテンシャルはあると思っています。重要なのは「人」。患者様・ご家族に安心していただくための関わりやサービスの質を高めていきます。

社会復帰という患者様の入院目的を達成するために、専門性の向上が基本であることは揺らぎません。学会や外部研修への参加、他院との情報交流等は積極的に実施し、最先端の手法や知見を積極的に取り入れます。患者様・ご家族は、急な病気や怪我で体に障害が起き、辛さや悲しさ、これからどうなるのかという不安を抱いておられます。心理面からサポートして〝安心〟していただく関わりを第一に、リハビリを充実させていきます。

加えて意識するのが、生活部分で感じやすい不便や不満です。入院目的は治療や社会復帰であっても、病院で過ごす時間が患者様の生活であることに変わりはありません。「病院だから仕方ない」で片づけず、できるだけ〝満足〟していただけるものに高めていきたいと思っています。現在は、食事改革、病室アメニティの見直し、コンシェルジュの配置、Wi-Fi環境の整備やコンビニでの買い物同行などの取り組みを推進しています。安心と満足のある生活環境でストレスなくリハビリに集中できる環境を整え、総合的な満足度を高めていくことが『日本一のリハビリ病院』への道だと思っています。

開院からこれまでの5年間、大原で培ったノウハウを近衛に移植する形で歩んで来ました。理念に掲げる「患者様、利用者様の不安を取り除き、いつでも安心してご満足いただける医療・介護サービスを提供します」という想いは、変わらず重要な指針になります。ただし、「本院（大原）ではこうしてきたから」と殻にこもるのではなく、「患者様や職員のためにはこうする方がいいから」という発想で積極的に挑戦していくことが重要です。

京都近衛リハビリテーション病院は、京都大原記念病院グループの今後の事業展開を考えるうえでも、重要な挑戦の拠点です。患者様・ご家族と向き合うなかで、不安を取り除き、満足していただくために必要なことは何か。京都近衛リハビリテーション病院のポテンシャルに期待し、覚悟を持って挑戦していきます。ご期待ください。

「車椅子の旅人」三代達也氏が職員に講演！

車椅子で単独世界一周を果たした「車椅子の旅人」三代達也氏に、職員に向けてご講演いただきました。交通事故で突然始まった車椅子生活という第二の人生に自暴自棄になりながらも、どのように「旅」という挑戦が始まったのか。病院でのリハビリや世界各地での温かな触れ合いを通じて抱いた時々の心情と「経験を伝えることで、また別の誰かの一歩につながる」とする旅の理由に、会場とオンラインで100名超が聞き入りました。三代氏との縁をつないだ児玉万実医師（御所南クリニック 院長）は、「私たちは退院後、何十年と続く患者様の人生に想いを持って診療する必要がある。講演で感じたことを、一人ひとりが明日から活かしてほしい」と総括しました。

病院の畑で育てたさつまいもを五感で堪能！

京都大原記念病院が取り組むグリーン・ファーム・リハビリテーション®の一環として、さつまいもを使った様々な活動を行いました。収穫・食事提供に加え、レクリエーション（芋の皮むき、芋ばん作りなど）も開催し、秋の恵みを様々な方法で楽しみました。自ら収穫・皮むきしたさつまいものポタージュスープを食べた患者様からは「これ私が収穫したお芋さん？甘くておいしいわぁ」と喜びの声が。今年は病棟でもにぎわいを見せ、通りがかりのスタッフも急遽レクに参加するなど、活動の広がりを感じる企画となりました。

大原健康プロジェクト 来迎院町でも開催！

12月3日に大原健康プロジェクト（主催：大原体育振興会）の一環として、来迎院町の住民を対象とした健康促進イベントが開催されました。昨春、小出石町で開催した回が好評を博し、企画が立ち上がったもので、京都大原記念病院グループは、来迎院町、大原自治連合会、大原社会福祉協議会などと共に、準備を進めてきました。来迎院町会長・澤田氏の「今日のイベントを、住民同士のコミュニケーションの機会にもしてほしい」との挨拶の後、「歩く」をテーマに、理学療法士がウォーキングのポイントを解説しました。参加者からは「取り組みを大原一帯に広めてほしい」と期待の声が上がりました。今後も、地域の健康促進に寄与するグループを目指します。

京都大原記念病院グループを題材にした書籍が発行！

「京都大原記念病院グループの足跡に見る 超高齢時代を乗り切る地域再生の処方箋」。著・猿渡知之（株式会社日本経済研究所理事・大正大学地域構想研究所客員教授）。以下、書評（月刊誌「ガバナンス11月号」掲載）より。2025年、後期高齢者の医療・介護ニーズは増加する一方、病院数や医師数（労働力）は不足する。この打開策の一つが「地域へのシフト」であり、医療・介護・生活支援等が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が求められている。（中略）本書では、同グループの取り組みを具体的に紹介した上で、地域再生への寄与についても言及。超高齢時代を乗り切るヒントとなる一冊だ。

京都大原記念病院グループ
KYOTO OHARA HUMAN CARE NETWORK

orinas
オリナス
について

患者様、ご利用者、ご家族の心に寄り添い不安を取り除くために、職種や組織、医療や介護の枠にとらわれず、人や地域と織りなすつながりのなかで生まれる様々な場面を季節ごとに紹介します。

お問い合わせ

TEL／075-744-3121（代表）
FAX／075-744-3126
MAIL／kouhou@kyotoohara-gr.jp

WEB

Facebook